

九州大学附属図書館と狩野文庫

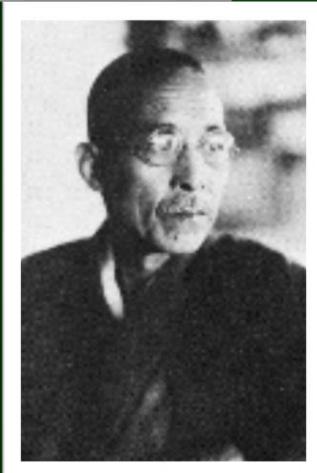
— 眼科学教室旧蔵本を中心に —

日時 平成27年11月26日(木) ～ 12月16日(水)

平日 九時～二十時三十分

土日祝日 十時～十六時半

場所 九州大学附属図書館 医学図書館一階ロビー



「知の巨人」狩野亨吉の蔵書が本学医学図書館にもたらされた背景には、「眼科学教室初代教授」大西克知、「夏目漱石の親友」菅虎雄との交流がありました。本企画では、貴重古医書の展示とともに三人の人物のかかわりをご紹介します。

はじめに

本企画について

狩野亨吉は、近代日本を代表する思想家・教育家・大蒐書家です。その莫大な蔵書の多くは、東北大学に収められ、狩野文庫として全国的に知られています。近年の調査により、実は九州大学も附属図書館が設置される1922年以前に、狩野亨吉から大量の図書を購入していたことが判明しました。九州大学が狩野亨吉より購入した図書は、医学図書館貴重書庫中の眼科学教室旧蔵の類書・医書類、中央図書館狩野文庫の朝鮮本・人名録・書目類、中央図書館桑木文庫中の数学天文書、以上三つのコレクションが現在確認されています。その数は総計約2000部7500冊に及び、その中には九州大学を代表する貴重書が多数含まれています。狩野がこれだけのコレクションを九州大学にもたらししてくれたのは、医学部眼科学教室初代教授 大西克知、理学部の基礎を築いた工学部数学物理学教室教授桑木彥雄といった、九大草創期の人物との親交があったからです。

2015年は狩野亨吉と大西克知の生誕150周年にあたります。これを記念し、本企画では、狩野亨吉が九州大学にもたらしした貴重な図書のうち、眼科学教室旧蔵本を中心にをご紹介します。

なお、内容は電子展示「狩野亨吉と九州大学」を基に構成しています。

眼科学教室図書室

眼科教室教授大西克知と狩野亨吉

大西克知は、日本近代眼科医療の草分け的存在であり、明治38年（1905）に九州大学の前身である京都帝国大学福岡医科大学の初代眼科教授として招かれ、世界有数といわれる規模を誇った眼科教室の基盤を作った。特に大正12年（1923）竣工となった眼科教室棟の新築は最大の事業であり、海外視察の成果を盛り込みつつ自ら設計し、そこには充実した医療設備・機械が導入された。唯一煉瓦を用いた図書室も、防火シャッターと鉄扉を備え、地下室まであった。昭和2年（1928）頃の眼科教室の蔵書数は約19000冊であり、その規模は他の教室を圧倒し、「日本一」（『九大風雪記』）の図書室と称せられた。特に5000冊を超える和漢古医書が特徴で、そのほとんどが狩野亨吉によりもたらされたものである。

大西と狩野は、大西の義兄で第一高等学校教授菅虎雄を介して交流があった。明治24年（1891）、大西は、菅虎雄の妹孝代と、東京英語学校長杉浦重剛（1855～1924、大西・菅の恩師）の媒酌で結婚している。大西が東京にて眼科を開業していた明治30年前後、熊本の第五高等学校に在職中の菅が上京に際して滞在したのが大西宅であった。狩野と菅は帝大在学以来の親友であり、上京した菅に会うため狩野が幾度となく大西宅を訪問していた。



眼科学教室（昭和6年撮影）

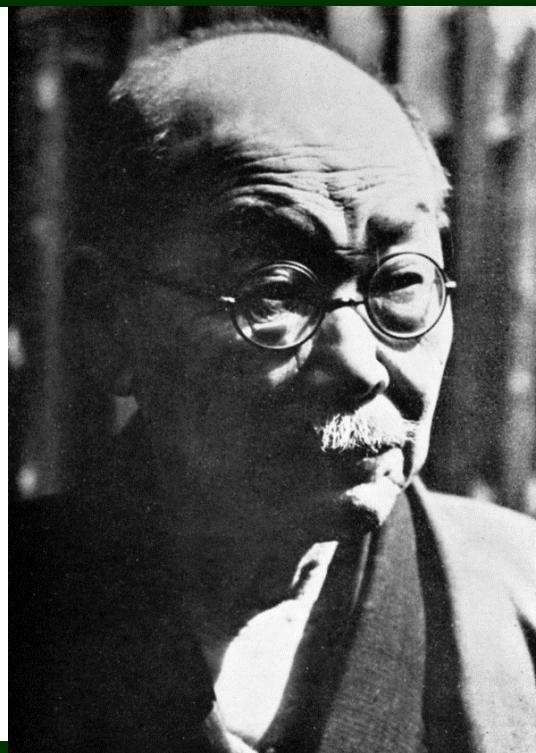
大西は、眼科教室の図書整備にあたり、東京にて入手できる図書の斡旋を旧知の狩野に依頼した。大正8年度に『国書解題』・『国書刊行会叢書』、大正9年度に汲古閣版『十七史』、明板『三才図会』等の類書類を購入しており、当初は医書ではなくむしろ図書館向きの大部な参考図書類を求めていた。大正10年度からは、医書の大量購入が始まり、それは大西が退官する大正15年5月以降の昭和2年まで続くが、その間にも、類書等の参考図書類の斡旋を依頼している。眼科教室に最新の設備を整えながら、一方で和漢の古医書を蒐集し、医学の発展史を理解することを重視していたことは、大西の優れた見識というべきだが、それだけではなく、類書や史書等の医書以外の大部な参考図書類を揃え、本格的かつ総合的な図書館の創設を目指していたことは特筆に価する。

人物紹介

狩野亨吉（かのう こうきち）（1865～1942）

出羽久保田藩士狩野良知の次男。帝国大学数学科・哲学科を卒業、金沢第四中学校、第五高等学校を経て、第一高等学校校長となる。1906年、京都帝国大学文科大学初代学長に就任、内藤湖南、幸田露伴ら正規の学歴がない民間学者を京大に招いた。辞職後、書画や刀剣の鑑定・売買を業とした。安藤昌益、志筑忠雄らの思想家を紹介したことでも知られる。また、夏目漱石の友人としても知られ、『吾輩は猫である』の苦沙弥先生や『それから』の代助のモデルの一人といわれている。その膨大な蔵書の内、10万冊以上が東北大学附属図書館狩野文庫に、日記・書翰類は東京大学駒場図書館狩野文庫に、古文書類は京都大学総合博物館に収められている。

写真の出典：安倍能成編『狩野亨吉遺文集』（岩波書店、1958）



大西克知（おおにし よしあきら）（1865～1932）

眼科医、眼科学者。伊予松山藩侍医大西宗節の孫。明治17年（1884）東京大学医学部予備門に学び、明治18年（1885）、ドイツに留学（チュービンゲン大学）して眼科学を専攻した。明治23年（1890）に岡山の第三高等学校医学部教授に任じられた後、明治28年（1895）、上京して大西眼科医院を開設、日本眼科学会創立にも参加した。明治38年（1905）、京都帝国大学福岡医科大学の初代眼科教授として着任。大正15年（1927）退官、名誉教授となる。在任中の大正12年（1923）には、海外視察の成果を盛り込みつつ自ら設計した眼科教室棟が竣工。世界有数といわれる規模を誇った眼科教室の基盤を作った。



菅虎雄（すが とらお）（1864～1943）

ドイツ語学者。筑後久留米出身。家は有馬藩典医の家系。明治14年（1881）、東京大学医学部予科（後に東京大学予備門医科）に入学し、卒業後、同予備門（後に第一高等中学校）文科を経て帝国大学文科大学独逸文学科（第1期）に入学、明治24年（1891）に卒業し、明治28年（1895）旧制第五高等学校教授となる。帝大在学中、狩野亨吉と親交を結ぶ。また、夏目漱石（1867～1916）の親友でもあり、漱石を五高に招いたのも菅である。明治35年（1902）、第一高等学校教授に。教え子に芥川龍之介、菊池寛らがいる。能書家としても知られ、夏目漱石の墓碑は菅虎雄の筆になる（ちなみに漱石の葬儀に於ける友人代表は、狩野亨吉がつとめた）。

写真の出典：原武哲著『夏目漱石と菅虎雄』（教育出版センター、1983）



狩野と菅は、夏目漱石の生涯にわたる親友でした。日記や書簡から、三人が頻繁に行き来していたことが分かります。

実は、夏目漱石全集（岩波書店）の題字は、狩野亨吉の筆によるものです。

年譜①

西暦(年)	元号	大西克知・九州大学関連事項	狩野亨吉関連事項	菅虎雄関連事項
1864	元治元年			福岡県御井郡呉服町の医師、菅京山の次男として誕生
1865	慶応元年	愛媛県松山で大西克育の次男として誕生	秋田県比内城三の丸で狩野良知の三男として誕生	
1869	明治2年		久保田(秋田県)に移住	
1871	4年		明德館東高に入学	
1876	9年		東京麴町に移住、番町小学校に入学	
1877	10年		母千代子逝去	
1878	11年		番町小学校卒業、第一番中学校入学	
1879	12年		第一番中学退学、東京大学予備門に入学	
1880	13年			上京
1881	14年	東京大学医学部予科入学		東京大学医学部予科入学
1882	15年		予備門の外、中村敬宇の同人社塾に入る	東京大学医学部予科を予備門に合併
1884	17年	東京大学予備門入学	東京大学予備門卒業 東京大学理学部入学	東京大学予備門二カ年の過程修業
1885	18年	ドイツに私費留学 ハルレ大学でグレーフェ教授の指導を受け、理学、医学を学ぶ		東京大学予備門医科卒業 英語のクラスに入る
1886	19年		兄元吉逝去	東京大学予備門を第一高等中学校改称 第一高等中学校本科一部文科に入学
1888	21年	チュービンゲン大学でナーゲル教授の指導を受け眼科を専攻	東京帝国大学理科大学数学科卒業 暁星中学フランス語専修科に入学 東洋商業学校講師として物理学講座を担当	第一高等中学校本科文科卒業 帝国大学文科大学独逸文学科入学
1889	22年	医学博士の学位を取得	東京帝国大学文科大学哲学科二年編入	狩野亨吉と同学年
1890	23年	帰国 第三高等中学校教授に就任、岡山県立病院眼科医長を嘱託される *「眼科」としての独立は、治22年の東京帝国大學に次いで2番目		狩野亨吉らと共に第三回内国博覧会を上野公園に見学
1891	24年	菅虎雄の妹孝代と結婚	東京帝国大学文科大学哲学科卒業、大学院に入学、「数学のメソロジー」について研究	夏目漱石、狩野亨吉らと共に写真撮影 帝国大学文科大学独逸文学科卒業 東京英語学校教授となる
1892	25年		大学院修了 第四高等中学校教授として金沢に赴任 西田幾多郎の持ち家に入る	久留米眼科医南琢磨二女南静代と結婚 日本中学校教員となる
1893	26年	「眼科雑誌」を創刊する	校長転任のためその事務取り扱いを命じられる	東京美術学校教育学教授嘱託を受ける
1894	27年		第四高等中学校教授を依頼退職、東京に戻る	夏目漱石が菅虎雄宅に寄食し、一か月後突然飛び出す 夏目漱石、狩野亨吉と頻りに往来

年譜②

西暦(年)	元号	大西克知・九州大学関連事項	狩野亨吉関連事項	菅虎雄関連事項
1895	明治28年	第三高等中学校を辞職 東京神田区錦町3丁目1番地に「大西眼科医院」を開業		愛媛県尋常中学校英語教諭に夏目漱石を斡旋 第五高等学校教授嘱託として熊本に赴任後、教授となる
1896	29年	大西克知首唱で「日本眼科学会」第1回創立準備会が開かれる		第五高等学校英語講師に夏目漱石を推薦、夏目漱石が菅虎雄宅に1ヶ月下宿
1897	30年	「第1回日本眼科学会」開催される *明治29年に創立された「日本解剖学会」に次いで古い学会 *大西克知が「日本眼科学会雑誌」の編集・発行・校正・発送・事務・会計を一手に担当する	菅虎雄に会うために頻繁に大西眼科医院を訪問	夏目漱石と共に久留米高良山に登る 狩野亨吉宅を頻繁に訪問 病気のため非職を命ぜられる 療養のため上京する
1898	31年	菅虎雄が大西克知宅に寄寓する	夏目漱石の招きにより第五高等学校教授、教頭として熊本に赴任 第五高等学校を退職 第一高等学校校長に就任、帰京	第一高等学校で独逸語授業を嘱託される 大西克知のもとに寄寓する
1899	32年	東京帝国大学から「線状性網膜炎の一実験」で医学博士号取得	安藤昌益の「自然真営道」全100巻92冊の筆書本購入	
1900	33年			夏目漱石英国へ留学
1902	35年			第一高等学校教授に任ぜられる
1903	36年	勅令第54号により京都帝国大学第二医科大学を福岡に置き京都帝国大学福岡医科大学と称する 勅令第68号により同大学に眼科学第1講座が設置される		夏目漱石が帰国し、第一高等学校と東京帝国大学で働き始める *夏目漱石は英国滞在中から菅虎雄や狩野亨吉に熊本ではなく東京に戻りたいと頼んでいた 南京三江師範学堂で働く
1905	38年	大西克知が初代眼科学講座教授に任ぜられ眼科学講座を担当し、附属医院眼科主長を兼任する		
1906	39年	第2代福岡医科大学附属医院長を任ぜられる	京都帝国大学文科大学初代学長として京都へ赴任	帰国
1907	40年	夏目漱石が朝日新聞の医学関係の記事執筆者に大西克知周旋を菅虎雄に依頼	甥剛太郎の養父として本家に入籍 文学博士の称号が与えられる	第三高等学校教授として京都に赴任、狩野亨吉宅に同居する 夏目漱石が東大と一高を辞し朝日新聞社の専属作家となる 狩野亨吉と頻繁に往来 第一高等学校教授に任ぜられる(狩野亨吉の推薦による)
1908	41年	「第12回日本眼科学会総会」を福岡(眼科学教室の講堂)で開催、会長を務める 京都帝国大学福岡医科大学図書閲覧室竣工	安藤昌益の存在をはじめて世間に公表 病気を理由に京都帝国大学退職	
1909	42年	図書閲覧室開館		妻静代死去
1910	43年			長男・重武死去
1911	44年	九州帝国大学医科大学となる		

年譜③

西暦(年)	元号	大西克知・九州大学関連事項	狩野亨吉関連事項	菅虎雄関連事項
1912	明治45年 大正元年		東北帝国大学へ狩野文庫の納入始まる この頃より後輩山本修三の鍵会社に関係し、その債務の責任を負って苦勞した	
1913	2年		東宮の教育掛担当の内相談を断る 東北帝国大学総長の推薦を辞退する 西洋楽譜全部を東京音楽学校に寄付する	第一高等学校第二語学科主任を命ぜらる
1916	5年		夏目漱石逝去 夏目漱石の葬儀で弔辞を読む	田中クラと結婚するが、2ヶ月で離婚 夏目漱石逝去 夏目漱石の棺や墓碑銘を揮毫する
1918	7年			高崎ツタと結婚
1919	8年	九州帝国大学医学部と改称される 狩野亨吉蔵書の眼科学教室への購入始まる	書画鑑定の「明鑑社」を開く	
1920	9年	4月10日 欧米各国へ出張を命ぜられ 6ヶ月間各国を巡歴、帰国		
1922	11年	九州帝国大学附属図書館設置		
1923	12年	新眼科教室病室竣工(大西克知が設計)	書画鑑定並に著述業の看板をかかげる 東北帝国大学図書館への第二次納本	
1924	13年	新築建物に於いて診察に従事		
1925	14年	第三内科研究室より出火し焼失の被害及ぶが、眼科新建築は被災せず		
1926	大正15年 昭和元年	依頼免本官、講師嘱託 講師解職 九州帝国大学名誉教授の名称を授けられる		
1927	2年			妻ツタと協議離婚
1928	3年			高良大社の石碑を揮毫
1929	4年		東北帝国大学図書館への第三次納本	
1931	6年	狩野亨吉蔵書の眼科学教室最終受入	「書画落款印譜大全」第1輯を刊行	呉家累代墓(多摩霊園)を揮毫
1932	7年	直腸癌で逝去、享年68歳、従三位勲二等に叙される	「書画印譜続編」に序文を執筆	第一高等学校教授を退官し講師となる
1933	8年		漱石詩碑碑文を書く 「科学的方法に拠る書画の鑑定と登録」を自費出版	漱石詩碑の碑陰に揮毫(修善寺)
1935	10年			直木三十五追悼碑に揮毫
1936	11年		「天津教古文書の批判」を発表する	一高門札揮毫、篆刻を依託される
1940	15年			依願により一高講師嘱託を解かれる
1942	17年		桑木或雄らと共に「日本科学古典全書」全15巻の監修担当 逝去	
1943	18年		東北大学図書館への第4次納本	逝去

狩野文庫売却記録①

眼科学教室旧蔵本の狩野文庫については、いくつかの文献に記述があります。

■反町茂雄編『紙魚の昔がたり』明治大正篇（八木書店、1987）

「[狩野]先生がその蔵書の一部を東北大学へ売りましたのが六万円で、ここにありません[売立]目録の分の入札額が二万何千円。・・・（中略）・・・それ以降は九州大学へも御自分でどんどんお売りになって、自分の名では悪いから、門の傍の菱山雄平という人の名義を用いてかなりお売りになりました」

■大野六郎（大正6年卒）「忘れ得ぬ人々 大西克知先生の思い出(下)の(一)」 （『九大医報』31-3、1961）

「図書館は赤煉瓦造りで是等の建築とは別に少しはなれて建てられた。火の用心の為に渡り廊下で連絡せられて居る。吾々はこれを図書館とは呼ばず、旧来通り図書室と呼んで居った。眼科としては大きさに於ても日本一であろう。質に於ては前述の通りである。新図書室は階上に現代文献があり、階下に古書がある。古書は京大狩野学長の全蒐集を買取ったもので、和漢の眼科古書、其他の珍書が堆積されて居る。狩野学長は有名な蔵書家で、人格者で鳴って居った。先生の好きそうな人物である。是等の図書を一見すると先生の偉さ加減が、計り知れる様な、また計り知れない様な感に打たれる」

■山川幸雄（元医学図書館職員）「古医書について」（『医学図書館』19-3、1972）

「大西コレクションを書くにあたって、筆者が幸運と思ったことは、教授の遺族が当市内に在住されていることだった。必要とあればいつでも直接訪ねることができるからである。殊に2代克保博士(九大昭9卒。耳鼻咽喉科開業医)は趣味の共通から筆者は月に1~2度は顔を合せる。・・・（中略）・・・ところで筆者は大西コレクションの源流や背景が知りたく、克保博士に出会った時尋ね、また一度は直接自宅を訪ね判ったことは、大西コレクションの蔭の協力者として、菅虎雄(1864~1943)教授の名を書き洩してはならぬことだった。・・・（中略）・・・この在清時代の菅教授に大西教授が古医書類の蒐集を依頼された。大西コレクションの源流の一つがここから始まっていた。国内発行でない漢籍本の多い理由がうなずけた」

『九州帝国大学医学部附属医院眼科図書原簿』（和書雑誌）によれば、眼科教室が菅虎雄の在清時代（1903~1906）に古医書類を蒐集した事実はない。大西個人の蔵本として菅に依頼したのでなければ、狩野の存在が遺族に伝えられていなかったことで生じた誤伝ではないかと思われる。なお、眼科教室では狩野から購入する以前より和漢古医書類の蒐集は始まっており、明治42年（1909）から大正元年（1912）までに東京の横尾文行堂から、大正6年（1917）に福岡市内の相川鳳文堂からまとめて購入している。

狩野文庫売却記録②

眼科学教室の図書原簿には菱山雄平名義で狩野亨吉から納入した図書の記録が残されています。

納入者:菱山雄平

受入日	備品番号(眼科教室)	各受入日の最初に記載された書名	数量	金額
1919.10.3	2342	国書解題	1冊	17円
1919.12.12	8127~8355	国書刊行会叢書	229冊	311.28円
1920.5.14	2445~2844	汲古閣版二十一史[十七史の誤り]	400冊	368.6円
1921.3.29	2942~3376	増補文献備考など	4部 435冊	478円
1921.5.9	3377~3568	格致鏡原など	2部 192冊	145円
1921.8.24	3586~4019	医道二千年眼目編など	78部 434冊	302.3円
1921.10.20	4051~4411	医語類編など	221部 361冊	432円
1922.1.18	4417~4958	阿蘭陀伝票崎流家方集など	107部 544冊	329.1円
1922.2.17	2010~2015	日本医事雑誌索引	6冊	12.5円
1922.5.23	4979~5054	医院治験録など	39部 76冊	62.85円
1922.6.29	5055~5205	医事問答など	40部 151冊	59.7円
1922.7.1	5206~5227	医家初訓など	19部 22冊	13.25円
1922.7.3	1313	衛生宝函	1冊	0.35円
1922.8.3	5231~5314	医経原旨など	39部 84冊	52.15円
1922.8.21	1314	仏文眼科雑誌	1冊	6.4円
1922.10.14	5325~5461	格致餘論疏鈔など	34部 137冊	81.05円
1922.11.16	1243~1272	動物学雑誌	30冊	207円
1922.12.13	5474~5636	伊百乙薬性論など	64部 163冊	177.55円
1922.12.23	5637~5861	挨穴資蒙など	63部 225冊	106.75
1923.2.23	5874~5937	医事集談など	11部 64冊	48.3円
1923.3.24	5948~6137	医事秘記など	70部 190冊	144.5円
1924.3.8	6168~6187、6189 ~6273	医学捷経など	52部 105冊	91.5円
1924.8.12	6281~6436	医学院学範など	44部 157冊	163.25円
1924.11.12	6437~6486	医門関など	34部 50冊	52.8円
1924.12.5	6487~6924	医方類聚など	29部 438冊	428.55円
1925.3.31	6946~7004	雑病広要など	29部 59冊	113.6円
1925.5.12	7015~7111、7113 ~7135	医学菅錐外集など	34部 120冊	149円
1925.5.19	7112、7136~7231	回生堂方林など	50部 97冊	115.15円
1925.6.15	7233~7249	癸未掌記など	14部 17冊	43.1円
1925.7.3	7250~7385	温知病因など	65部 136冊	131円
1925.7.15	7386~7426	医学至要鈔など	17部 41冊	44.75円
1925.8.21	7435~7469	運氣論諺解など	20部 35冊	47円
1925.10.30	7473~7541	天中記など	10部 69冊	64円
1926.1.15	7547~7603	胃気論など	18部 57冊	49円
1926.2.4	7607~7655	儒門医学など	10部 49冊	35円
1926.7.14	7658~7693	医学所分限帳など	17部 36冊	35円
1926.9.4	1782~1821、7695 ~7702、7707~ 7718	泰西内科集成など	8部 60冊	8部 60冊
1926.12.11	7703~7706、7743 ~7895	本草万方鍼線など	14部 157冊	72.2円
1927.3.25	7896~7959	医事表など	8部 64冊	27円
1927.8.27	4026~4028、4036 ~4049、4968~ 5321、7967~8009	溝部有山備忘録など	17部 62冊	30.7円
1931.3.31	1313	医事雑誌	1冊	1.5円
計				1289部5554冊 5143.19円

狩野文庫売却記録③

狩野亨吉の日記、見積書、眼科学教室の図書原簿に残った記録を照らし合わせると、狩野が売却した数量や金額が合致することが分かります。

年	狩野亨吉の日記より		見積書（狩野亨吉控え）		眼科学教室図書原簿	
1919 (大正8) 年	9月9日	「九日午前福岡大西へ図書解題送ル」			10月3日	2342 国書解題 1冊 17円
	11月6日	「九州大学ヨリ送金」				
1920 (大正9) 年	4月11日	「九大へ二十一史荷送ル」			5月14日	2445～2844 汲古閣版二十一史[十七史の誤り] 400冊 368.6円
	6月2日	「午後日本銀行ニ至リ九大ヨリ送ル[所?]金¥368.60ヲ受取ル」	5月15日	39部76冊 62.85円	5月23日	4979～5054 医院治験録など 39部 76冊 62.85円
1922 (大正11) 年	6月15日	「九大ヨリ金62.85小切手到来」				
	6月16日	「九大へ書籍一箱送ル、九大送金二回立替」				
	6月18日	「九大へ見積書送ル」	6月18日	40部151冊 59.7円	6月29日	5055～5205 医事問答など 40部151冊 59.7円
	6月21日	「九大へ小包出ス」	6月21日	19部22冊 13.25円	7月1日	5206～5227 医家初訓など 19部 22冊 13.25円
	7月13日	「九大へ荷物出ス」	7月13日	39部84冊 52.15円	8月3日	5231～5314 医経原旨など 39部 84冊 52.15円
	7月19日	「九大ヨリ送金72.95受取ル」				
	8月17日	「九大送金52.15」				
	10月30日	「九大ヨリ送金81.05受取ル」	9月29日	5部21冊 26.75円 29部116冊 54.30円	10月14日	5325～5461 格致餘論疏鈔など 34部 137冊 81.05円
	11月16日	「九大へ手紙出ス」	11月16日	67部178冊 190.05円		
	12月29日	「九大送金177.55受取」	11月23日	重複返却 →64部 163冊 177.55円	12月13日	5474～5636 伊百乙薬性論など 64部 163冊 177.55円
1923 (大正12) 年	3月4日	「九大へ送本並見積書」	3月4日	70部 190冊 144.50円	3月24日	5948～6137 医事秘記など 70部 190冊 144.5円
	5月8日	「九大法文数学天文等ノ書取調ニカカル」				
	7月18日	「江藤来九大へ送ル書籍ノコトニ付相談アリ」				
	8月31日	「九大へ送ルベキ医書ヲ調査ス」				
1924 (大正13) 年	2月13日	「九州大学へ書籍見積書ヲ発送ス」	2月13日	52部109冊 91.50円	3月8日	6168～6187、6189～6273 医学捷経など 52部 105冊 91.5円
	5月5日	「九大ノ送金ヲ受取ル」	7月25日	44部157冊 163.25円	8月12日	6281～6436 医学院学範など 44部 157冊 163.25円
	9月4日	「九大送金163.25受取ル」				

資料紹介：類書

ここからは、狩野亨吉が大西の依頼に応じて選んだ本の中から代表的なものを紹介します。

眼科教室旧蔵類書

類書とは、あらゆる事物に関する文献を部立てごとに分類・整理して収録した書物を指し、今日の百科事典に類するものと言える。

医学図書館貴重書庫に所蔵される眼科教室旧蔵の類書は、大西克知が狩野亨吉から購入したもので、総計17部1081冊を数える。目録等が整備されず従来まったく知られていなかったが、明版等貴重な漢籍を含み、後に設立される附属図書館や法文学部はもちろん、全国的に見ても所蔵が少ないものも多く、貴重なコレクションとなっている。

類書には、一部本草学（中国医学・薬学）の文献が含まれており、その閲覧を目的に収集されたとも考えられるが、当時の眼科教室が医学書のみならず、多種多様な分野の図書を収集していた事実からは、むしろ類書の百科事典的性質に着目しての選書であったと考えられる。

三才図会—中国の絵入り百科事典—

『三才図会』 医学図書館所蔵

眼科/和書3297-3376号

明・王圻編。万暦37年（1609）刊。106巻80冊。「三才」すなわち天・地・人のあらゆる事象について、絵図と文章でもって解説する。江戸時代を代表する類書である寺島良安『和漢三才図会』は、『三才図会』を範としている。

参考文献：大淵貴之「類書—中国の百科事典—」（『九州大学百年の宝物』丸善プラネット、2011）



資料紹介：古医書①

眼科教室旧蔵古医書

医学図書館貴重書庫に所蔵される眼科教室旧蔵の古医書のうち、大西克知が狩野亨吉から購入したものは総計1259部3744冊を数える。医学図書館所蔵の古医書については、研究開発室室員のミヒェル・ヴォルフガング氏のご尽力により目録・電子化が進んでおり、展覧会等でも紹介されたが、その中には狩野からもたらされた貴重書も少なくない。

注目されるのは、丹波園部出身の漢方医寺尾元長（1800～1847、「柳外園蔵書印」）、越後加茂の蘭方医森田千庵（1798～1857、「山吉文庫」等）の旧蔵書が多数含まれていることであり、狩野が良質の蔵書群を丸ごと買い取って、それを惜しみなく九州大学に売却したことがわかる。

重訂解体新書銅版全図—精密な解剖図—

杉田玄白・大槻玄沢訳

『重訂解体新書銅版全図』

天保14（1843）刊

医学図書館所蔵 カ-31 眼科/和書3617号

『重訂解体新書』は、安永3年（1774）に刊行した『解体新書』の訳に満足しなかった杉田玄白（1733～1817）の命で大槻玄沢（1757～1827）がクルムスの『解剖図表』（ターヘル・アナトミア）を訳しなおしたもの。銅版図は、中伊三郎（?～1860、大坂の蘭学者中天游の徒弟）の作で、木版に比べはるかに精密になっている。

本書には「狩野氏圖書記」の蔵書印が捺されており、眼科教室の狩野本発見のきっかけの一つとなった。

参考文献：ミヒェル・ヴォルフガング解説「東へ伝わる西洋医学」『東西の古医書に見られる身体』、『解体新書とターヘル・アナトミア：解剖図の洋風表現』（武田科学振興財団杏雨書屋、2012）

参考：慶應義塾大学所蔵オランダ語版『ターヘル・アナトミア』



資料紹介：古医書②

五臓之守護并虫之図—五臓六腑を襲う虫—

『五臓之守護并虫之図』 医学図書館所蔵 コ-25 眼科/和書7245号

人間ははるか昔から、自身や身近な動物で目にする幾つかの虫について認識し、想像上の虫を病因としたりしていた。本書は道教に由来する大変ユニークな虫を描いた江戸期の写本。

参考文献：ミヒェル・ヴォルフガング解説「蟲」

(『東西の古医書に見られる病と治療—附属図書館の貴重書コレクションより』)



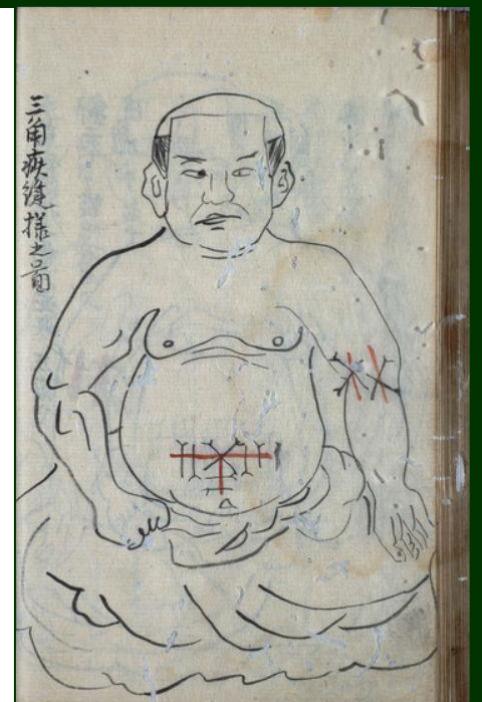
和蘭金瘡—紅毛流医学の写本—

『和蘭金瘡 附請腫物師語』 医学図書館所蔵 オ-26 眼科/和書5672号

鎖国下の江戸時代では、長崎出島のオランダ商館医を通じて、西洋医学が日本に伝えられた（いわゆる紅毛流医学）。本書は紅毛流外科の写本の一つで、中医風の腫れ物図が附されている。本草学者白井光太郎（1863～1932）旧蔵。

参考文献：ミヒェル・ヴォルフガング解説「外科処置」

(『東西の古医書に見られる病と治療—附属図書館の貴重書コレクションより』)



おわりに

大西克知については奇人・変人のエピソードが先行して伝聞されていますが、大西は日本眼科界に甚大な貢献をしました。

大西は明治30年に日本眼科学会を創立し、「日本眼科学会雑誌第1巻」を刊行し、大正14年第29巻が完了するまでの29年間、雑誌の編纂、庶務、会計、発送の全ての業務を診療の傍ら独力で行いました。研究面では、「点字用タイプライター」を考案し、関する特許を2件取得し、廉価な「タイプライター」を普及しました。また視力表、近点計、大西式双眼視野形、大西式双眼ルーペ等を発案しました。脈なし病は高安一大西病として有名です。診療の面では患者全ての診察を自身で行い、診察日誌の記入の仕方に厳しく、大正14年の九大病院大火災の際には、何よりも一番(患者の次)に日誌を救出するよう指示しました。日誌は自分の仕事の生命である、其日其日の仕事は辞世と同じであると述べました。儉約家のため研究費・教室費の予算が莫大に残り、新式の機械、図書室の建築、図書の購入に充てられたのです。大西が設計した眼科教室図書室は日本一と言われる程の規模の赤煉瓦造りの建物で、地下室に「日本眼科雑誌」(編集・発送もしていたので、在庫などが部屋の2/3を占める)他、1階に和漢古書・珍書、2階に現代文献があり、狩野亨吉から購入した「狩野文庫」は1階に配架されていました。

東北出身の狩野亨吉と、久留米出身の菅虎雄、東京の夏目漱石が同じ時代に生き、ある時は同居し、その折々の居住地である東京、京都、熊本で親交を温めました。信頼し合い就職の推薦紹介もしました。時には大西克知が開業した東京の大西眼科医院が、義弟である菅虎雄と彼らとの交流の場になることもありました。人と人との交流と信頼関係によって狩野文庫が眼科学教室の大西克知に譲られたのです。

本企画を最後までご覧いただき、ありがとうございました。

参考文献コーナーに、関連図書、論文などを集めています。1階閲覧室でごゆっくりご覧ください。また、アンケートにもご回答いただければ幸いです。

【主要参考文献】

1. 日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会編 『日本眼科の史料』日本眼科学会編 1997
2. “弔辞”『日本眼科学会雑誌』 v.36 下巻 日本眼科学会 1932
3. 大野六郎 “忘れ得ぬ人々 : 大西克知先生の思い出 (上)、(下の1)” 『九大医報』v. 30, No.6、v.31, No. 3
4. 青江舜二郎著『狩野亨吉の生涯』明治書院 1974年
5. 鈴木正著『狩野亨吉の研究』ミネルヴァ書房 2013年
6. 原武哲著『夏目漱石と菅虎雄：布衣禅情を楽しむ心友』教育出版センター 1983

企画：九州大学附属図書館 相部久美子、梶原瑠衣、山根泰志
ご協力いただいた関係者の皆さまと、たくさんの先行研究に感謝いたします。